

かけがえのない島

宇検村立田検小学校 四年 松枝 瑠渚

むかしむかし、遠い昔。二柱の神様が力を合わせて島をつくった。しばらくすると、その島にはたくさんの生き物たちがすむようになった。その様子を見て安心した二柱は、別の場所にも島をつくるため、その島を出ていった。

それからしばらくたった。島は、いつの間にか、まものたちにしはいされてしまった。この島にやってきた生き物たちの中に、まものもまじっていたのだ。島の空は真っ暗で、草木はかれ、人間や動物はひっそりとかくれてすごしていた。島にはいつも、シャーシャーといううめき声が鳴りひびいていた。まものたちはかげにおおわれている。だれも、まものの本物の姿を見ることがなかった。

ある夜。一羽のリユウキュウコノハズクが神に命じられて島に飛んできた。

「なんて気味の悪い島だ。一日中真っ暗で、夜みたいだ。」

不安になったリユウキュウコノハズクは、毎日、ホホーホホーニャーニャーと鳴きつづけた。

ある時、クロウサギが、どこからともなくシーシーと鳴きながら姿をあらわした。しかし、その時。クロウサギは、ハブにねらわれていた。シュルシュルと静かに近づくハブ。クロウサギにとびかかろうとしたしゅん間、リユウキュウコノハズクがバサバサッと飛んできて、ハブを足でつかまえた。

「何をしているんだ。あんなやせ細ったクロウサギをねらうなんて。あのまものたちをたおしたら、食べるものがふえるかもしれないぞ。」

ハブは、クロウサギをあきらめた。そして、みんなで力を合わせてまものたちをたおすことにした。

毎日毎日、まものをたおす方法を考えた。しかし、まもののおし方はなかなか見つからない。その時、ふと、クロウサギが言った。

「なぜこの島は真っ暗なんだ。もしかしたらまものたちは、光が苦手なのかもしれない。」

リユウキュウコノハズクは、リユウキュウサンコウチヨウをよびよせるように神様へお願いをした。この鳥は、「月日星こいこいこい。」

と鳴きながら光をよべるのだ。島にきたリユウキュウサンコウチヨウは、一生けん命鳴きつづけた。

ある夜。一つの星が空を流れた。次の日には、二つ。また次の日には、三つ。毎日少しずつ流れる星がふえた。

そして、とうとう、ゆめがかなったみたいにまん天の星空と月があらわれた。

夜が明けると、まん天の星のかわりに、太陽がどうどろと姿をあらわした。日光に照らされ、まものたちの正体があばかれた。細長い手足とするどい口の不気味な生き物。ケンムンだった。山に入っては植物や動物を次々と食いあらし、島からはなれることなく長い間住んでいたのだ。まものの本物の姿が分かったハブは、たたかい、勝って、はらをみたしつづけた。

ケンムンとよばれた生き物が島から姿を消すと、動物たちがかくれがから出てきた。しかし、食べ物がなかった。そこで、島の上をよく飛んでいたり鳥のアカシヨウビンが、草木のたねを何度も何度も運んできては地面に落とした。そして、キュロローと鳴いて雨をふらした。

アカシヨウビンのおかげで、植物はグングン育ち、緑ゆたかな島となった。島は、動物や植物があふれる楽園となった。

神様は、平和になったこの島にルリカケスをよび、見守りを命じた。ルリカケスは、きけんがせまるとギャーギャーと鳴き、仲間に知らせた。

何年もすぎた。島の川にも変化がみられた。きれいな

川にしかすまないといわれるき重なりユウキュウアユの群れが楽しくくらすようになった。

それから数百年。自ぜんゆたかなこの島は、あま美大島と名づけられ、世界いさんに登ろくされた。空からは鳥たちが、山の中ではハブやクロウサギなどの動物たちが、川や海では多くの魚たちが、今でもこの島を守りつづけている。

【評】奄美の貴重な動植物を想像力豊かに取り入れながら構成しています。また、鳴き声なども効果的に描写されていて素晴らしいです。ケンムンや神様と身近な動植物を組み合わせて、自然に親しみを持つような作品となっています。

(田検小 教諭 谷口 大悟)

